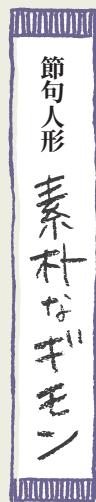


現在の東京都中央区日本橋室町には「十軒店跡」の看板が立っています。江戸時代、この辺りには上巳の節句の頃に雛市が立ち、大変なにぎわいを見せていたそうです。現在は「COREDO 室町テラス」ができ、人々がゆきかうこの地に、かつてあった十軒店と雛市について調べてみました。



『江戸名所図会 1巻』十軒店雛市
国立国会図書館デジタルコレクション

江戸時代の節句人形市

江戸時代、東海道の起点として江戸と各地を結ぶ中心であった日本橋。十軒店はその日本橋から北へ向かう大通り沿いに面した、本石町二丁目と三丁目に挟まれた両側町である（現・室町三丁目）。江戸時代初期にここに十軒の商家があったことから「十軒店」と呼ばれるようになった。もとは「石町（こくちょう）」の通称で親しまれた本石町は江戸市中でも指折りの商業地帯であり、ここに店を持つことは江戸の商人にとって憧れであったといわれる。

江戸時代中期、次第に財力をつけてきた町人階級が、公家や武家にならって節句行事を盛んに行

うようになると、十軒店では上巳の節句や端午の節句にあわせて人形を商う市が立った。2月末から3月はじめにかけては雛人形・雛道具などを商う雛市が、4月末から5月はじめにかけては五月人形や幟を商う冑市が、12月には破魔弓・羽子板を商う羽子板市が立ち、それらを買い求める人たちで大いに賑わった。

同じような雛市は尾張町・人形町・浅草茅町（現・浅草橋）・神楽坂などにも立ったが、十軒店のものは特に有名でひときわ賑わったと伝わる。出店の数は、江戸時代後期の寛政年間（1789~1801）には、41軒を数えるまでになった。

『江戸名所図会』に描かれた雛市

十軒店の雛市は江戸時代の観光案内書にも紹介されている。天保5年（1834年）、斎藤月岑によつて刊行された『江戸名所図会』1巻に収載された「十軒店雛市」には、道ゆく人によく見えるように内裏雛が並ぶ様子や、小屋掛け（仮設の店舗）に雪洞や屏風などのお道具類が並ぶ様子が描かれている。道にはたくさん的人が行き交い、雛人形を眺める武士や鯛を売る魚売りの姿、振袖姿の子どもや赤ちゃんを抱いた女性の姿が描かれる。江

戸時代の雛市のにぎわいが伝わってくるようだ。

さしもの雛市も、明治後期から三越をはじめ各百貨店が雛人形の定価販売を開始すると、掛け値による売買を主とした前近代的な市の形態は次第に敬遠され、十軒店の地で製造販売を営む人形店の多くが関東大震災を境に姿を消していった。最後まで残存した「玉貞人形店」が閉店したのは平成10年代のことだった。

監修 林直輝さん（日本人形文化研究所所長）

参考文献 川田壽『江戸名所図会を読む』（1990年、東京堂出版）

瀧川泰彦『原色再現江戸名所図会よみがえる八百八町』（2010年、新人物往来社）